

北里大学特別栄誉教授

大村 智



【略歴】

- 1935年 山梨県生まれ
- 1958年 山梨大学学芸学部卒業
- 1963年 東京理科大学大学院修士課程修了
- 1968年 (社)北里研究所入所
- 1971年 米国 Wesleyan 大学客員教授
- 1975年 北里大学薬学部教授
- 1990年 (社)北里研究所理事・所長
- 2007年 北里大学名誉教授
- 2013年より現職、文化功労者

「至誠天に通ず」

私が微生物と「出会った」のは、修士課程修了後、間もない頃のワインの研究中であった。その後、それまでに学んだ化学と微生物学とを融合した研究へと入っていき、抗生物質の研究を続けていくなかで、構造的にも生物活性の面でも多様性豊かなマクロライド抗生物質に興味を持った。その後、微生物の専門家をはじめ、多くの異分野の研究者と共同研究を積極的に行った。そして、そこで得た知識や経験から、微生物と化学という異質なものを融合させた研究ができたことによって、次々と微生物由来の新しい化合物を見つけていくことができたのだと思っている。

研究者としての基礎は師について学んだことから始めることにはなるが、模倣ではその師止まりである。そこに自分自身のオリジナリティーを加えて、新たな分野を開拓していくことが重要だと思う。

ノーベル賞を受賞したシドニー・ブレナーは著書の中で「科学を前進させるのに最も適した人物は、他の分野から参入して来た人物である」と記述している。彼自身、RNA の研究をして優れた成果を挙げた後、彼にとって異分野であった「線虫」の研究に取り組み、賞を得た人物である。その言葉は「無知でいることの価値」と「知りすぎることによる弊害」を、如実に言い表していると思う。ブレナーは線虫の研究をする際に、線虫に効果のある化合物の論文を発表していた私のところにも討論に来ている。研究に関連する情報を貪欲に収集する姿勢には見習うべきものがある。

私の研究室では微生物代謝産物から発見したり、合成したりした化合物で製品化された物質も少なくないが、これらの成果は自分たちの研究室だけでは容易に達成できなかったものであり、共同研究先との連携によるところが大きい。

自分たちがいかに優れた知識や技術を持っていても、製品に至る総合力を発揮できなければ薬の開発は成功しない。共同研究にかかわる研究者の総合力で、開発に向けての研

究の障害や危機を乗り越えることができたものも多い。その意味でも積極的に企業など外部との連携や共同研究を推奨したい。

北里研究所に自分の研究室を立ち上げる際に、留学先の米国ウェスレーン大学の M. ティシュラー教授の助力を受け、大手製薬企業から研究費を得ることができて共同研究を開始した。この中で、企業の持つ世界中のニーズに関する情報や彼らが得意とする評価方法などの開発研究の支援を受けたことで、研究を加速させ薬を世に送り出すことができた。この共同開発は、国際産学共同研究の先駆けとなった。その成功の要因の一つは、企業側のコーディネーターとなった担当者との良い「出会い」である。彼との信頼関係を築けたことで、研究だけでなく特許出願や契約書作成まで円滑に進めることができた。

研究を進めるにあたっては、高いレベルの環境下に身を置くことも重要である。その意味で、若手研究者には一流の研究室への留学のチャンスを生かし実現することを勧めたい。一流の場所には一流の人物も集まりやすく、技術や情報も揃っているため研究の効率もよくなる。そこで自分も一流になるべく努力を続けるとともに、経験を生かして後続の研究者たちの応援をも行ってほしい。

「至誠天に通ず」という言葉がある。目指したものに向かってあらゆる努力を続けていれば、必ず道は開ける。私の転機は、いつも「出会い」から生まれた。だからこそ、私は「一期一会」と「恕の心」を大切にしてきた。

細菌学者のパスツールは『幸運は準備された心を好む。"Chance favors prepared mind"』と語っている。何事にも謙虚に努力し、道を切り開いていってほしいと願う。

- - - - -

事務局注:大村先生のご経歴は中央公論新書「大村智:2億人を病魔から守った化学者」で読むことができます。